

木下順二評論集

1964~1965年

8

未来社刊

木下順二評論集 8 【全一〇巻】

一九七八年二月二五日 第一刷発行

定価一八〇〇円

◎著者／木下順二

発行者／西谷能雄

発行所／株式会社未来社

東京都文京区小石川三の七

電話（八二四）五三〇〇代表

振替東京七〇七三六番

本文印刷／新協印刷

装本印刷／形成社

製本／今泉誠文社

凡例

一、本評論集全十巻は、木下順二の評論、随想のほとんどすべてを可能な限り時間順に収録したものである。但し各巻の内容は、次の六項目に分類整理する。

I 主として演劇一般について

II 主として自作について

III 主として演劇外の問題について

IV (以上を「自」に即してのものとすれば) 主として「他」について

V 主としてシェイクスピアについて

VI その他(あるいは主として馬について)

なお、単行本として既刊の『ドラマの世界』(中央公論社、一九五九年、未来社、一九六七年)、『ドラマとの対話』(講談社、一九六八年)、『随想シェイクスピア』(筑摩書房、一九六九年)及び『シェイクスピアの世界』(岩波書店、一九七三年)は、それぞれ一貫したテーマによる一冊本であるゆえに、本評論集に収録しない。『日本が日本であるためには』(文芸春秋新社、一九六五年)は、雑誌論文などを集めた評論集であるゆえに、分解して本評論集に収録する。

一、本評論集は全十巻をもって構成され、それぞれの巻には、次にかかげる年度内に執筆されたものを収録している。

第1巻 一九三五年から五〇年まで

第2巻 一九五一年から五三年まで

- 第3卷 一九五四年から五五年まで
第4卷 一九五六年から五七年まで
第5卷 一九五八年から五九年まで
第6卷 一九六〇年から六一年まで
第7卷 一九六二年から六三年まで
第8卷 一九六四年から六五年まで
第9卷～第10卷 一九六六年～七〇年及び補遺
- 一、本評論集は、現代仮名づかいで統一したが、収録文章が三五年間にわたっているため、漢字の用法その他で不統一な部分がある。しかし、当時の文体を尊重してそれらはそのままとした。
- 二、各篇末尾に、初出の誌紙名・年月日を判明する限り付した。

一九七二年一〇月

編集

菅井 幸雄
松本 昌次

* おことわり 紙数の都合上、当初は全8巻の予定でしたが2巻増え、全10巻となります。ご諒承下さい。(編者)

木下順二評論集

8

目次

凡例

I

社会主義社会の演劇	一一
『ベケット』寸感——映画と演劇の“感動”の違い	一七
秒的制約	二二
労演の機関誌について	二三
おしゃべりを気にしましょう(1)	二六
ことばとがめをしましょう	三〇
「黒幕」覚え書き	三三
演劇講座の意味について	三五
共通項は何か	三七
日本語のしゃべれない日本人	四一
おしゃべりを気にしましょう(2)	四五

II

統一すべきこと	五一
好日抄	五二

わたしの母校……………	三
『冬の時代』のこと……………	五
なつかしい熊本弁……………	七
歴史とドラマ……………	六
歴史劇をなぜ書くか……………	五
相変らず、しかしやっと——敗戦をどう迎えたか……………	六
『冬の時代』……………	三
『日本が日本であるためには』あとがき……………	四
私の近況……………	六
故郷……………	六
私のつきあった堺利彦氏——仏頂面と爆笑の間にあるもの……………	八
私のつきあった堺利彦君——勸売文社時代堺利彦君文体……………	九

III

自然……………	一九
断食月……………	二三
仕事……………	二三
真相を追究する義務……………	二五

天 草	二九
明治維新のエネルギー	一三八
忠ナラント欲スレバ——主体性ということについて	一四六
訪中追想	一五二
忘れてはならないこと	一五六
一九六五年八月一五日の思想	一六二
女子大寮の自由の限界	一六六

IV

やろうと思つてやれないこと	一九二
宮川栄寿郎さん	一九二
戯曲選評	一九五
魅力あふれる語りくち——佐々木喜善『聴耳草紙』	一九九
激動する昭和期の証言——高見順日記が語るもの	二〇二
随筆選評	二〇六
民俗学の魅力	二〇八
せまる強烈な「イメージ」——戸井田道三『能』	二〇九
監修者の一人として——岡倉士朗演劇論集『演出者の仕事』	二二一

ようこそ老舎先生——中国作家代表団を迎えて	二二三
『上海にて』と上海についての感想——堀田善衛『上海にて』あとがき	二二五
戯曲選評	二二五
こんな一家——四人のこの家族をみなさんはどう考えますか？	二三〇
“忘れるな”という言葉の中味—— 藤島宇内監修 日本読書新聞編 『朝鮮人』を読んで	二三三
流血をしいられた民衆——『革命の河』	二三六

V

オセロ	二四二
シェイクスピアは日本に何を与えたか——一九六四年、生誕四百年祭に	二四八
ソヴィエト映画『ハムレット』を見て	二五二
シェイクスピアをどう理解するか——一九六四年、生誕四百年祭に	二五五

VI

鎧	二六三
今村安『馬術』	二六六
シェイクスピアと馬・序説	二六九
馬術から見た西部劇	二七三

乗馬歴	二六六
無目的的	二六二
技 術	二六五
びいある	二六八
私もファン	二六九
漱石を読んでいて	二九一
遊佐幸平著『遊佐馬術』	二九六
馬と多忙と	二九九

I

社会主義社会の演劇

去年七月の夜、上海の宴会で、私は酔って失言をした。中国の演劇に甚だ不満があるというような性質の話を、個人的になら中国の友人といくらしてもいいだろうし、事実話しあったこととは何度かあるのだが、私たち日本作家代表団を迎える公式の宴会で、もっとも、みんな大分いい気持になって騒ぎだしてからのことではあったが、立ちあがって私がそうしゃべったというのは、何といっても失言だろう。翌朝、城山三郎君が、にやにや笑いながら私の発言内容を伝えてくれるのを聞いて、なにしろ酔って自分の発言内容を忘れたというのは生れて初めてのことだったから、私は甚だ閉口した。

が、中国の何人かの人たちは、（それが中国の人たちの「礼節」からではないと私は信じているが）、私の無遠慮さをおもしろがってくれたようでもある。あの「不満」の内容をもっと聞かせてほしいと、後日まじめに私にいった人もあった。もっとも私は席上で、中国と同時に日本の演劇にも不満を感じるといったのであって、だから別に国際儀礼の上でも一向かまわん

のですよと、私を安心させてくれた中国の友人もあった。

ことがらは要するにそれだけのことなのだ。だが私にはあとまでそのことが、心のどこかに引っかかる思いがして、その思いはまだ続いている。ただし国際儀礼上どうのこうのということがではなく、そこで私が不十分に、不正確に、しかし「in vino veritas」として口に出したことの内容、その問題が、という意味である。その問題を考えるということは、直接的には中国の演劇の、広くいえば社会主義社会の芸術の問題を考えるとということであるわけだが、一方ではそれは、私たち自身にとっての問題を考えるということにもなるだろう。

ただ、抽象的に論を進めたのでは、いいかえれば、中国で私が体験した具体的なことがらに即して語るのではないと、それこそ話が抽象的になってしまいそうだという気持が私の中にある。ともかくも、ああいう発言をしたところまで酔って行った順序というものについて、私はまずしゃべっておかないと気がすまない。

*

中国にはいつから上海の夜までの約一カ月間、案内役の劇作家陳白塵氏が、酒席になると時々私の顔をいたずらっ子のように横眼で見ながら、どうも私の酒量を多少牽制していた気配がある。一昨年演劇代表として陳先生訪日のおり、昼から夜まで、三度席をかえていっしょに飲み通したことがあった。その時はお互い酔態を呈したわけではなかったが、（ことに陳先生は酒量私に倍する力量だから悠然たるものだったが）、しかしなんにしてもこいつは飲むというので、陳先生いくら心配だったのではないか。なにしろ簡単に案内役というが、中国の場

合のそれは、私たち（今度は総勢五名だった）が境界線を越えて中国に第一步を印した日から、またそこに戻って別れを告げるまでの毎日、これらの日本人がつかれてはいないか、健康はどうか、見たいもの聞きたいものももっとありはしないか、その他その他いろいろと細心の注意をはらい相談にのり、そして一同を十分にのんびりと休ませ楽しませるといふ、その全責任をしまった案内役である。陳先生は、まさにとりかかろうとしていた太平天国に取材する長篇戯曲の仕事をして、私たちの案内役を買って出られたのであったらしい。

やや余談になるが、劇作歴三十年、大人の風格ゆたかなその陳先生と、小柄で神経の動きも軽快な児童文学者謝冰心女史とは、巧妙な口喧嘩の好敵手であるようであった。やりあっている中国語の中味は、むしろ私には分らない。北京の空港で飛行機を待っている時だったが、やはりお二人でやりあっているそばにぼんやり坐っていた私へ謝冰心さんが突然「ほうらね」ときれいな英語で声をかけた。「陳さんはあたしのような福建の人間には偏見を持つてゐるのよ。とにかくこの人は」——そのあとの中国語を通訳くんが、「大男子主義です」と通訳した。むしろ大男子主義をもじった新造語である。陳先生はにやりと笑って口をじじた。それにしても、定刻を過ぎたというのに、まだ出発のアナウンスメントがない。私が何となく、「飛行機の出発と女の外出はいつもおくれる」とつぶやいたら、通訳くんがすぐ朗々と通訳してしまったので、「あら」と謝冰心さんがまた私を見た。「折角陳さんと休戦したら、今度はあなたが攻撃をかけてくるの？ いまのそのいいかたは」——「大男子主義です」と、通訳くんがあとを續けて通訳した。「その——」と私がいった。「その今のことを英語でいってごらんさい」

“Hum——”と謝さんが答えいつた。“Great——yes, great manism.”そこでみんなが笑い声をあげた。

その飛行機で延安へ行き、次に西安へ飛び、ここでも歴戦の老詩人柯仲平、農村に引きこもって『創業史』を書き続けている柳青、短篇作家として精力的な王汶石——一昨年カイロのA作家会議でも会った——などなどの、それぞれに個性的な芸術家諸氏と酒杯をかわして愉快であった。西安から上海へは汽車で三十数時間。駅へ見送りにきた王汶石氏が、窓から二本の酒びんを入れてくれた。汽車が動きだすと、そのびんをかざして見ながら陳先生が笑っていた。ここ陝西省最高の酒は、中国八大名酒の一つ西鳳酒だ。ところが王汶石は、人に贈るとなると、自分の故郷山西省のこの竹葉青酒しか持ってこない。頑固的王汶石。おもしろい。——われわれはそこで、強さ六、七〇度はあろうと思えるその竹葉青酒のせをぬぎ、暑さがたぶん四〇度を越していただろう夜中のコンパートメントで飲みながら、日中両国のうまいものくらべをいつまでも論じあったりした。

そして、台風の余波ですっかり涼しくなっていた七月の上海の、あの宴会ということになる。八大名酒の中でも最もうまいとされる貴州茅台酒を四大女優の一人である張瑞芳さんについでもらいながら、ほかの社会主義国では人民俳優とか功勞俳優とかいう称号がありますね。それが中国にはないというのは一体——演劇評論家の劉厚生さんが質問を引きとって、それはね、芸術家に対するそういう評価というものは、国家がではなくて人民大衆が与えるものだということが第一。次に人間の全面的評価というものは、ずっと年をとってから、いや死んでか